発問例

●二二一ページ

問 **ブザーの音が「重苦しく」（1行目）と表現されていることから、どのようなことが考えられるか。**

答「彼」にとって快い音ではないこと。また、「彼」が積極的な人付き合いをしていないこと。

補 今後の物語展開について不穏さをイメージさせる効果もある。「彼」の内面と物語全体との両面における意味合いを考えることが可能である。

問 **◉「ブザーの音をほとんど聞いたことがない。」（3行目）から、「彼」にとってブザーがどのようなものだと分かるか。**

答 あまり使わない、必要のないもの。

補 この後、「この間の電気屋だって…」（二二五・14）から、ブザーが電気屋に半ば強制的に取り付けられたということが語られていくが、不要なものであることで、「彼」の怒りや滑稽さは際立つことになる。

問 **「腹を立てながら」（9行目）玄関に出たのは、なぜか。**

答 ブザーの音が不快であることに加えて、不要なブザーの取り付けを許した自分を思い出したから。

●二二二ページ

問 **「鳥打ち帽のひさしを上方に弾いた」（5行目）という顎鬚の態度から、どのようなことがわかるか。**

答「彼」に対しては礼を欠いても構わないというような、横柄さや「彼」を軽んじる様子。

問 **◉「えたいの知れぬ狼狽を感じ」（16行目）たのは、なぜか。**

答 写真班が「彼」よりも家を重視しており、また、「彼」の家であるのに、その許可なしにものごとを進めようとしているから。

語句の研究

●二二一ページ

1重苦しく鳴り響いた。　小説の冒頭には作品全体の方向性が示されていることが多い。ブザーの音を「重苦し」く聞いたのは「彼」であることを示すと同時に、読者に対してもブザーの音がこれからの物語の展開を予期させるものとなっている。

1茶の間　和風住宅において、食事と家族のだんらんに使われる畳敷きの部屋。「台所の隣にあるのだ。」（二二一・6）とあるが、これは通常の様式である。

キー・ポイント　**モリソバ**　ゆでて水にさらして締め、せいろや皿などに盛りつけた蕎麦。そばつゆにつけながら食べる。本文では一貫して「モリソバ」あるいは「ソバ」と表記されている。似非外来語のようなカタカナ表記によって、（盛り）蕎麦が一般的な語義を超えて特殊な意味を持った一つのモチーフとして成り立っている。なお、「彼」は蕎麦を「ザル」（二三〇・1）に盛っている。

2よたよたと　足の動きがしっかりしていないさま。

3日曜日には来訪者はめったになかった　ここから物語内時間が確定できる。本作品の冒頭部には時間・空間など舞台の設定が凝縮されている。

5玄関のブザーと書いた　「書いた」という叙述によって、物語の書き手の存在を想起させられるが、こうした箇所はここだけである。

8おマケ　「御負け」が語源。店員が客との駆け引きに負けて値を下げる行為を指し

ていたが、のちに商品以外の物品を追加する行為も指すようになった。

9擦過し　かすめるように近くを通り過ぎること。

キー・ポイント　それにそれを許容した自分自身もだ。　理不尽に見える来訪者に対してだけでなく、自分にも怒りが向けられていることを、「彼」の人となりを見るうえで注意しておきたい。

●二一二ページ

1も一人　もう一人。「う」が省略されることで軽妙さが生み出されている。

2写真機　カメラ。現在主流となっているコンパクトデジタルカメラではなく、旧式のロールフィルムカメラ（二二四・図版）をイメージしたい。

キー・ポイント　鳥打ち帽のひさしを上方に弾いた。　人に挨拶をするときは帽子を脱ぐのが礼儀とされる向きがあるが、顎鬚は「彼」に対してそのようにしていない。この態度からは顎鬚の無礼さや不遜なさまよりも、「彼」の非人間的な扱われ方を見た方がよいだろう。

7いぶかしく　疑わしくの意。

7反問　何か尋ねられた時、こちらから逆に尋ね返すこと。問い返すこと。

14「近頃の建築はどこでも玄関が小さいのだよ。」　「彼」の家が比較的新しいことが、顎鬚の発話によって示されている。

●二一三ページ

2お心使い　「お心遣い」と表記すべきところではあろうが、原文ママとした。配慮の意。

注意する語句

（＊で用例を示した）

赤ら顔…赤みを帯びた顔。日焼けや酒焼けなどで赤らんだ顔。また、血色のいい顔。

＊彼は扉を少し開け、その赤ら顔をのぞかせた。

たしなめる…よくない点について指摘する。

＊上司にやんわりとたしなめられた。

狼狽…慌てふためくこと。うろたえる。

＊思わぬ結果に狼狽する。

しゃにむに…なにごとも気にかけず、がむしゃらにやるさま。ひたすらに。むやみに。

＊しゃにむに働く。